

8. 杉野屋の結婚・婚礼の変化

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 出口, 悠紀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/4985

8. 杉野屋の結婚・婚礼の変化

出口悠紀

- I. はじめに
- II. 結婚の背景
- III. 婚礼のプロセス
- IV. 婚礼の変化のまとめ
- V. 考察

I. はじめに

杉野屋で様々な話を聞いた中で、私にとって非常に衝撃的な話があった。70歳代後半の女性が「私、結婚式の当日にだんなの顔、初めて見たわ」といったのだ。私が驚いて聞き返すと、その場にいた同年代の女性は「あの時代みんなそうや」、「結婚相手なんて、自分で決められる時代じゃなかった」と口々に語った。恋愛結婚、本人の意思が重んじられる現代の結婚のイメージとあまりにもかけ離れたその内容に私は非常に興味を持ち、どのような経過で現在のような結婚形態が一般的になったのかを調べようと思った。

そして、経緯を調べていくうちに、時代の変化に伴って変わる人々の結婚への意識、そしてそれが反映された婚礼形態に、私はさらに興味をそそられた。また、その変化の中に親が子を思う気持ち、子が親を思う気持ちという、いつの時代も変わらないものを見ることができた。

以下では現在杉野屋に住んでいる、あるいは杉野屋出身の既婚者を対象に、1940年代から現在までの結婚の事例を主な対象とする。II.では結婚の背景とその変化、III.では具体的な婚礼のプロセスを時代に沿って記述した。IV.では婚礼のプロセスの具体的な変化の記述、V.では変わりゆく婚礼形態とそれについての意識、そのなかにある変わらない人々の気持ち、これに焦点を合わせた考察をし、これからの杉野屋の婚礼に関する私なりの展望を述べてみたい。

II. 結婚の背景

杉野屋の「結婚式」をテーマとするに当たって、結婚に至るまでのプロセスや通婚圏、結婚年齢、結婚式の季節といった結婚式のあり方に関わる背景、その変化をまず見てゆく。

第2次大戦後すぐまでは、男女の出会いの機会はほとんどないに等しい状況であった。また、杉野屋内やその周辺の人同士の結婚が多かったという。この背景には、今のように金沢や県外での就職や進学はほとんどなく、男女の出会いは仲人や親の親戚・知人関係に委ねられるためそうなったといえよう。

第2次大戦後の1950年前後は、結婚の約束は本人同士がするものではなく、親や親戚に半強制的に決められる場合が主であり、結婚式当日、あるいは式の後にお互いが初めて顔を合わすという、今では考えられない出会いが一般的であったという。1940年代後半に結婚した女性は「式の3日後に初めて婿の顔を見た」といつていた。

親同士、親戚同士の紹介による見合いで、結婚が決められていた風潮に変化が見られ始めたのは、1950年代後半からで、本人同士が顔を合わせる見合いが徐々に増えてきた。ある男性の場合、見合い前に親や親戚、仲人らによって、嫁の候補者の身内に何か問題のある人はいないかといった事前調査を行った。見合い結婚では、出会ってから結婚までの期間が長くなることはあまりないため、この調査を結婚の判断材料にしたという。また、別の男性は、婿の祖母と嫁の隣の集落の人が友達であったことから縁談話が持ち上がり、結婚前に金沢へ2人で映画を観に行くなど何回かデートを重ねたという。恋愛結婚は無いわけではないが、数は決して多くはなかったようだ。ある60歳代の男性によると、1960年代前半に杉野屋の近くに織物工場ができ、県外からの就職者が増えたので、この頃から他県出身者と杉野屋出身者との結婚が増えてきたのではないかとのことである。

最近では、見合い結婚はほとんどなく、恋愛結婚が主になってきている。通婚圏も杉野屋周辺に限らず、県外の人と結婚し、県外に住むという夫婦もいる。表1、2によると、杉野屋の中だけで結婚している割合は多く思えるが、実際、若年層の人たちは、杉野屋の外で生活している場合も多く、この表は現在の杉野屋の出身者の結婚の実態を反映しているものではない。ある70歳代の男性は、「ここ最近では世話役（お見合いをまとめる人）が杉野屋におらん」といつていた。また、1990年代前半に結婚した人々は、「杉野屋の出身同士での結婚は、自分達は聞いたことがない」ともいつていた。

結婚する年齢は、近年徐々に上がってきている。全国で女性は晩婚化の傾向があるといわれているが、杉野屋もその例外ではない。1950年代に結婚した女性は20歳で嫁いだが、本人は「まだ早いと思った」といつ。しかし、当時は20歳代前半が女性の適齢期、20歳代半ばが男性の適

齡期と考えられていて、その当時に結婚したある女性は「親に早く嫁行けといわれた」、「(結婚)しなきゃいけないかなと思った」という。また、1950年代に20歳代半ばで結婚したある男性は「社会の流れに従いたい」という一般常識を重んじ、「(自分が長男なので)順番に結婚しないと、後の者(弟)が結婚しにくくなる」という年功序列を重視していた当時の思いを語った。

表1 杉野屋の女性が結婚した男性の出身地

出身地 結婚年代	杉野屋	志雄町内	羽咋郡市	県内	県外	計
1962~65	0 (0)	0 (0)	1 (25)	0 (0)	3 (75)	4 (100)
1966~70	1 (3)	6 (17)	11 (31)	8 (23)	9 (26)	35 (100)
1971~75	5 (7)	10 (15)	18 (27)	12 (18)	22 (33)	67 (100)
1976~80	3 (6)	3 (6)	13 (28)	13 (28)	15 (32)	47 (100)
1981~85	4 (44)	3 (33)	1 (11)	1 (11)	0 (0)	9 (100)
1986~90	1 (100)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (100)
1991~97	1 (14)	1 (14)	1 (14)	3 (43)	1 (14)	7 (100)

* () 内は比率 (%)

表2 杉野屋の男性が結婚した女性の出身地

出身地 結婚年代	杉野屋	志雄町内	羽咋郡市	県内	県外	計
1962~65	0 (0)	0 (0)	3 (30)	3 (30)	4 (40)	10 (100)
1966~70	1 (3)	2 (5)	4 (10)	12 (31)	20 (51)	39 (100)
1971~75	5 (8)	6 (10)	15 (25)	16 (27)	18 (30)	60 (100)
1976~80	3 (11)	3 (11)	9 (32)	6 (21)	7 (25)	28 (100)
1981~85	4 (24)	2 (12)	5 (29)	5 (29)	1 (6)	17 (100)
1986~90	1 (8)	1 (8)	1 (8)	7 (58)	2 (17)	12 (100)
1991~97	1 (7)	2 (21)	3 (21)	5 (36)	2 (14)	14 (100)

* () 内は比率 (%)

資料出所： 表1、2とも「広報しお」

しかし、現在の杉野屋では、30歳代になっても結婚をせず、杉野屋の外で働く男女が多い。ある30歳代の女性は、母に対して「まだ結婚する気はない」と話していたそうだ。70歳代の男性はこの傾向を「女性が大学進学、就職などを男性と同じようにするようになり、結婚して男性に頼るという意識が薄くなったのが原因では」と言い、60歳代の女性は「姑などの関係を

面倒くさいと思っているのでは」と語っていた。また、杉野屋の男性の結婚に関しては、晩婚化の傾向と共に、結婚をしたくても相手がいけないという問題もある。ある70歳代の女性は、「昭和30年頃は、『農家の嫁になると、食いつばぐれがない』ということでみんな農家に嫁いだ」といっていたが、最近では農業で生計を立てている家も多くなり、農業に生活をかけるような時代でもなくなったため、「農家に嫁ぐ」ことはそれほど魅力的でなくなったのかもしれない。

私は、長男を跡継ぎにするために杉野屋に住んで欲しいという親の強い思いが杉野屋の男性の結婚を難しくしているのでは、と仮説を立ててみたが、「年金もあるし、年寄りが1人で生きて行ける時代になった」、「最近では長男でも同居しない」という声も聞かれ、この仮説は的外れかと思った。しかし、「もし嫁が来たら、この家の裏に家を建てる」、「近くに住んでくれると孫の面倒を見てあげられる」、「若い人たちと一緒に住んでいないと、最近の話に疎くなってしまおう」という声も聞かれ、また、実際に婿取りをした家もあり、本音のところを言えば跡継ぎを望んでいるのではないかと感じた。同様に、杉野屋には本家や分家など、代々続いている大きな家が多いので、このまま絶えてしまうのが惜しい気持ちもあるのではないだろうか。

30歳代の子を持つ親達の間では、結婚に関しては「早く結婚はして欲しいが、本人の意思を尊重」、「無理にさせるわけにはいかない」という意見の一致が見られた。特に、男性に対しては社会的信用のため、女性に対しては早く子供を生んで欲しいため、というのが「結婚してほしい」主な理由のようであった。

親の子に対する、そして特に娘に対する結婚についての意識は、1950年代の親が結婚年齢や結婚相手を決める絶対的な権限を持つものだというものから、現在のその決定を子に委ねるといふものに変化したという意味で、過去50年の間に正反対になったといえよう。

結婚式の季節については、杉野屋は農業を営む家が多かったため、かつては農閑期である10月から3月といった秋冬に結婚式を行う家が多かった。また、貸衣装が今ほど普及していなかったこともあり、結婚式に参列するために冬物の衣装とは別に夏物の衣装を用意するというのは、経済的に大きな負担になるといったことも関係していると考えられる。その様な季節に式が挙げられるため、式後初めて行われることになる3月のお寺参りに、新婦が初めてお寺に顔を出す事が多かった。現在では、会社勤めの人々が式に出席しやすいように、土日に式を行うことが多いが、季節に特にこだわるといふことはない。それよりもむしろ、新婚旅行に行くために会社を休めるかどうかということで、結婚式の日を定めるという。

III. 婚礼のプロセス

ここからは、結婚をした年代やお互いの出身地、結婚当時の年齢、結婚に至った経緯を絡めて、時代ごとに婚礼のプロセスを記述していく。各事例は、インフォーマント本人のもの、またはインフォーマントの子の婚礼についてのものである。

① Aさん（70歳代男性）、Bさん（60歳代女性）夫妻の場合

AB夫妻は1955（昭和30）年に結婚した。結婚当時、Aさんは26歳、Bさんは22歳であった。Aさんは杉野屋の出身、Bさんは志雄町の荻谷の出身であり、同年にお見合いをして、結納は式の1ヶ月前に、Aさんの父親が仲人と共に相手の家に行き、「娘さんを下さい」と結納金を渡した。Aさん本人は行っていない。Bさんは結納のときは、顔見せ程度であった。結納金の額は婿側の経済力によって差があるという。

婚礼当日、Bさんは午前8時過ぎに、実家のある荻谷から小型バスを貸しきって、その日の新婦の世話役となるニンソク（人足）、新婦の親の代わりを務めるオヤシロ（親代）と共に新郎の自宅に来た。玄関に入ったところで、新婦の家から持参した水と婚家の水とを混ぜて飲み干す「合わせ水」をして、新郎の姪に手を引かれ、花嫁暖簾をくぐって家に入った。花嫁暖簾とは、新婦が嫁入り道具の1つとして、実家の家紋を入れた暖簾である。Aさんによれば、普段は男性が家の代表で、女性が表に出ることは滅多にないというような男尊女卑の考えがあったが、結婚式では嫁が主役となった。そのため、式における座席は新婦を中心に嫁の親族がコの字型に座って、新郎側の親族は接待にまわった。花嫁衣裳は高島田、角隠し、紋付、黒の留袖、花婿は紋付のはかまで、宴は朝まで続いた。式の料理は、集落内の料理人に頼む場合が一般的であるが、Aさんの親戚に料理人がいたため、その人に依頼したという。

式の翌日、新婦側が用意した饅頭と、新婦が用意してきた米で炊いた赤飯を、近所の人に配った。血縁関係や付き合いの深い親戚には友禅などの風呂敷に包んだ形で配る。饅頭には「祝」の文字が印され、紅白饅頭、「ナガマシ」といわれる麦饅頭が、縁起がいいといわれる奇数単位で配布された。その日の夜には二番膳である「残酒」が行われた。婿は在所の人を招いて、「これからもよろしく」という意味を込めて、このとき嫁はお酌などをした。3月には「シドウキョウのお参り」といわれる婚家の菩提寺へのお寺参りがあり、新婦にとっては結婚後初のお寺参りになる。このお参りは「シショウドリ」と呼ばれる。

② Cさん、Dさん（ともに70歳代）夫妻の場合

CD夫妻は1955（昭和30）年に結婚した。Cさんは25歳、Dさんは21歳。Cさんは杉野屋出身、Dさんは志雄町の散田出身で、結婚に関しては全て親まかせで、見合いもせず、お互い写真を見せられたただけだったという。結納はCさんの母と仲人がDさんの家へ結納金を持って

行った。Cさんは結婚するのは早い方とっており、Dさんは早すぎると思っていたという。しかし、当時は結婚の決定権は親にあったため、東京の学校をやめて、散田から杉野屋へ嫁いできた。当時は集落内での結婚も多かった。

婚礼当日には、嫁を迎えるため、玄関で餅つきをした。新婦がいつ婚家に着くか正確にはわからないため、本当の餅は事前についておき、その時は米俵の蓋であるサンドラ（さん俵）を餅代わりに餅つきをした。ここでは、餅をつく音と歌が重要であるという。花嫁衣裳は式の間は高島田、宴のときは赤の打掛を着て、人足を送り出す際はこれで（式を）止めるという意味で留袖を着たという。料理は集落の料理人に作ってもらった。そして、式から帰っていく人たちに「わらじ酒」を振舞った。わらじ酒というのは、昔、道具運びをした人（ニンソク）がわらじを履いて帰っていくので、その人たちに酒を振舞ったことからそう呼ばれているようだ。式の翌日はオヤシロが近所にあいさつ回りをした。本人たちは行かなかった。式の翌々日、近所に新郎側と新婦側が半々で分担した饅頭を配った。新郎新婦は新婚旅行には行ったが、2人で一緒に行くところを近所の人たちに見られるのは恥ずかしいので、バス停まではバラバラで行ったという。当時新婚旅行といえば山中温泉か和倉温泉に行くことが主であったが、新婚旅行自体はそれほど一般的でなかったという。

③Eさん（70歳代男性）、Fさん（60歳代女性）夫妻の場合

EF夫妻は1957（昭和32）年に結婚した。Eさんは杉野屋出身、Fさんは羽咋市新保町出身。Eさん27歳、Fさん20歳だった。結納は親同士で済ませたため本人達はよく分からない。

婚礼当日、Fさんはタクシーで夜の8時ごろ、父親代わりの父オヤシロ（母方のおじ）、母親代わりの母オヤシロ（父方のおば）と共に新郎宅に来た。夜にも関わらず近所の人たちが見に来たという。うつむいて家の中にはいったとき、屋根の雪が首に入って冷たかったことをよく覚えているという。玄関をくぐって、合わせ水に使ったカワラケ（お猪口）を踏み台の上でオヤシロが割った。小学校3、4年生くらいの子と、中学校を卒業したくらいの2人の子に手を引かれ、暖簾をくぐって部屋に入った。部屋に入る際は、扇子を前において、お辞儀をして、扇子を帯に挟んではいった。その後、仏壇に参って、「三々九度」をした。（三々九度は本来は夫婦の固めの盃のはずだが、インフォーマントの語りをそのまま引用。）三々九度は、侍女役の「お手引き」の女兒と婚礼の席で「高砂の歌」を歌う謡いの人と嫁だけが部屋に入れた。その後、記念撮影をした。婿が式に出てきたのはこれが初めてであった。花嫁衣裳は黒地の着物と紋付の着物を着た。式の出席者は嫁側がおじ、おば、世話役（ニンソク）など7人程度、婿側は婿の家族と本家の人たちであった。式の終了後、新婦側の親戚は帰ったが、二番膳である残酒には、オヤシロが出席した。残酒の翌日、オヤシロが風呂敷と饅頭を持って、近所に挨拶回りに行った。新婦はこれに同行しない。

④ Gさん、Hさん（ともに60歳代）夫妻の場合

GH夫妻は1963（昭和38）年に結婚した。Gさんは杉野屋出身、Hさんは押水町出身で、Gさんは26歳、Hさんは23歳だった。結納には当人たちは出席しない。結納の日には、婿側の両親と近親者（人数は仲人の話し合いで決定）が嫁の家に行く。婿側が結納の品を床の間に飾る。仲人がきっかけを作り、両家は対面して挨拶をする。挨拶を言う人は品物を持っていった側で、そのときご膳が出される。これは親戚、近所内で専門の方や料理人を雇って料理を作ってもらった。このようにして結納を済ませた。

婚礼当日になると、花嫁をチョウチンボ（近迎え）が迎えに行く。近迎えとは、途中まで新婦を迎えに行く役のこと、昔は夜にちょうちんを持って、新郎の顔を知らない花嫁を迎えに行った役のためこう呼ばれている。この行為をモライウケとって、GH夫妻の場合、新郎の一番上の姉婿が近迎えとして新婦を迎えに行った。姉婿はそこで酒をもらった。嫁が婿の家の玄関に入る前に、親戚や近所の人が謡いの人として「高砂」を歌った。お手引きが水を持って玄関先で待ち、家の中に入る前にカワラケ（お猪口）に両家の一番水を注ぎ、嫁が口付けして飲んだ後に、カワラケを割る。これは身を粉にして、嫁ぎ先の家の繁栄のために頑張るという意味があるそうだ。嫁が玄関に入ると、お手引きが先導して嫁を家の中に入れる。玄関先で嫁が挨拶をする。それから花嫁暖簾をくぐって奥の控えの部屋に行き、白無垢に着替える。嫁、婿方の両親が、父、母、嫁の順で仏壇に焼香する。僧侶は呼ばないが、仏前結婚式の形をとったことになる。新郎はこの間は特にすることはない。三々九度はお手引き、夫婦のみで行われた。一番膳は昼に2時間ほどで行われた。参加者が帰るときにわらじ酒（感謝と無事を祈った冷酒）を振舞った。残酒には、GH夫妻は参加せず、18時ごろから始まった。出席者は一番膳に出席しなかった親戚、友人、隣近所（班）の人たちである。残酒の出席者が多数で、部屋に入りきらない場合は、さらに翌日に三番膳を設けることもある。近所への饅頭配りは、荻饅頭やどら焼きなどを13～15個ほどお重に詰めて配った。

⑤ Iさん（父親80歳代男性）、Jさん（母親70歳代女性）夫妻、Kさん、Lさん（Iさんの息子とJさんの娘、ともに50歳代）夫妻の場合

親子嫁入りと言われる特殊な婚礼の例である。親子嫁入りとは、夫のいない母とその娘と、妻のいない父とその息子が、それぞれ同時に結婚することをいう。IJ夫妻、KL夫妻は1970（昭和45）年に同時に結婚した。Jさんは40歳、Lさんは20歳だった。息子と娘の結婚式が主となって行われた。

婚礼当日、嫁は富山県の氷見市から杉野屋に嫁いできた。午前には嫁入りしたかったが、当時は嫁の田舎の方でみんなが賛成したわけではなかったため、午後には静かに来た。タクシーに乗って娘は高島田に赤い内掛け、母は留袖を着てきた。杉野屋についた時、近所のみんなが見に来

てくれたと言う。式の進行は、合わせ水、仏壇参り、三々九度をした後に記念写真を撮るという流れだった。仏壇を参るとき、娘（新婦）は白い内掛けに着替えた。披露宴の料理は専門の料理屋に頼んだ。一番膳に参加した人数は十数人で、披露宴には新郎新婦が揃って参加した。大さかずきを回して、最後に鯛の骨酒を飲んだ。このとき、息子夫婦は式後すぐに新婚旅行に出発するため、もうその場にはいない。このように新郎新婦が、式後すぐに新婚旅行に出発するようになったのは1960年代半ばからであると思われる。その後、残酒が行われた。深夜になっても宴会は続いた。近所への饅頭配りのための饅頭は、輪島塗のお重に入れたものを、嫁側が用意し、足りない分は婿側が用意した。15個～19個を親戚の方に配り、近所の人たちにも風呂敷（ちりめん）で包んだお重で、饅頭を配る。お重は後にE夫妻に返され、中にはお祝儀が入っていた。シショウドリでは、母も娘も留袖を着て3月にお寺に参った。

⑥ Mさん、Nさん（ともに50歳代）夫妻の場合

MN夫妻は1972（昭和47）年に結婚した。Mさん27歳、Nさん22歳だった。Mさんは杉野屋出身で、Nさんは羽咋市兵庫町の出身だった。結納は式の直前に、親同士が中心になって済ませ、新郎は顔見せ程度の参加であった。指輪は2人で買いに行った。

婚礼当日、式には新婦のオヤシロ（おじ、おば）、仲人が新婦より一足先に式場となる新郎の自宅に来た。夫側が新婦を迎えに行く。合わせ水は新婦が飲んだ後、オヤシロが杯を割った。新郎の衣装は紋付はかま、新婦は文金高島田と角隠しであった。家の主人（新郎の父）と新婦が仏壇参りをする。このとき新婦は打掛けだけを脱ぐ。三々九度のときにその式で初めて2人で隣に座る。三々九度の時は新郎新婦、お手引き、知人の謡の人のみが参加した。

披露宴（一番膳）は「濃い親戚」（オヤシロなど血縁や親交が深い人たち）、両親、兄弟などが出席する。集落の料理人来てもらい、親戚の女性たちは配膳などの手伝いをする。披露宴では新郎新婦は並んで座らされた。新郎側が接待をし、最後に鯛の骨酒を回し飲みすることによって、家と家とのつながりを確認する。披露宴の最中にオヤシロと新婦と新郎の親戚とで挨拶回りに行った。新婚旅行へはすぐには行かなかったため、そのまま班の人たちを招いて残酒をした。残酒のときは、訪問着にお色直しをした。この時、嫁側の出席者は既に帰っていた。式の最後には黒の紋付にお色直しをした。式の翌日に、新婦側が用意した紅白饅頭を近所に配った。この日に新郎新婦は新婚旅行に行った。式に友達を呼ばなかったため、新婚旅行後に家に招待し、ご馳走を振舞った。

⑦ Oさん、Pさん（ともに40歳代）夫妻の場合

Pさんは、1985（昭和60）年に結婚した。Oさんは30歳、Pさんは25歳だった。Oさんも、Pさんも杉野屋の出身だった。式の当日、花嫁はオヤシロと一緒にタクシーで来た。玄関で合わせ水を行い、仲人の方がお皿を割った。それから仏壇参りをして、記念撮影はせず、金沢市の

式場へ向かった。式の形態は神式のものだった。夫婦で三々九度を行った。翌日の残酒に新婦は参加し、その後、新婚旅行に行った。

⑧ Qさん（40歳代女性）の場合

AB夫妻の娘、Qさんは1987（昭和62）年に結婚。結納には当人たちが参加した。Aさんによれば、結納に当人たちが参加するようになったのは1980年代前半からだという。大阪の駅前のホテルで結婚式を挙げ、現在は奈良に住んでいる。

⑨ Rさん（40歳代女性）の場合

Rさんは1989（平成元）年に結婚。羽咋市のロイヤルホテルで結婚式を行った。

⑩ Sさん、Tさん（ともに30歳代）夫妻の場合

この事例は、婚礼の様子を取めたビデオを見て、記述したものである。

ST夫妻は、事例 ④ GH夫妻の息子夫婦。2000（平成12）年に結婚した。Sさんは杉野屋出身で、Tさんは富山県出身だった。

婚礼当日、30人以上の近所の人たちが、新婦を見に来る。見に来ている近所の人たちに、饅頭を配る。タクシーで新婦が到着する。合わせ水を玄関の前で飲み、オヤシロが割った。中に入ってから、暖簾をくぐって家の中に入る。高島田から白無垢にお色直しをして、仏壇に参る。婿側の父、母、嫁の順で焼香し、記念撮影をする。このとき初めて新郎が出て来る。その後、新郎新婦らがタクシーで金沢駅前の式場に向かい、近所の人たちも帰っていく。現在は富山に住んでいる。

⑪ Uさん、Vさん（ともに20歳代）夫妻の場合

この事例は、私が実際に参与観察した様子を記述したものである。

UV夫妻は、2002（平成14）年に結婚した。Uさんは杉野屋出身、Vさんは能登の中島町出身であった。

婚礼当日、花嫁が新郎宅に到着する前から、続々と近所の見物客が集まってくる。その中には子供の姿も多く見られる。お手伝いの方が、新婦が来る前に、近所の人たちに紅白饅頭を配る。婚礼のお手伝いや留守番は、「ヨボシ子」や式に招待した人の奥さんたちがする。「ヨボシ子」とは、親分・子分関係の子分にあたるもので、血縁関係があろうとなかろうとそういった関係を結ぶ場合がある。「寿」の文字と鶴の絵が印字された紙に丁寧に包まれた饅頭が、ダンボール箱に整然と詰められている。家紋入りのはかまを着た新郎の父、母が慌ただしく動きながら、新婦が来るのを待っている。新郎は紋付袴を着て、特に何もしていない。雨のためか、予定時間より遅れて新婦が到着する。新婦は玄関で合わせ水をする。花婿の両親が揃って玄関で出迎える。高島田・黒の打掛けを着た花嫁が女オヤシロに手を引かれて、家にあがる。花婿の両親と男性の仲人、そして花嫁・女性の仲人が向かい合って座り、挨拶をする。仲人は両家の仲を

取り持つ役割を持つため、ここでは新郎新婦おのおのの側に座る。その後、花嫁はお手引きの子供に手を引かれて、奥の部屋に行き、お色直しをする。花嫁の両親とオヤシロは仏壇の前に座っている。白無垢に着替えた花嫁が、お手引きの女の子に手を引かれて、花嫁暖簾をくぐって仏間に入る。花嫁暖簾は鮮やかな紅白のものである。仏壇の前に、花婿の父、花嫁、花婿、花婿の母が座って、この順に焼香をしていく。花嫁らはいったん仏間を出る。その後再び仏間に入り、新郎新婦、新郎新婦とその両親、新郎新婦とその親族一同の記念写真を撮る。

写真を撮り終わると、花嫁は奥の部屋で来た時と同じ衣装に身を包み、新郎と共にタクシーに乗って式場である和倉温泉「あえの風」へ向かう。親族の人々はマイクロバスに乗って式場に向かう。式の出席者は、血筋の意味でも付き合いの意味でも「濃い」関係の親戚、新郎新婦の会社の人、友人などだが、人数の制限があるので、親戚、会社の人が優先して呼ばれたようだ。式が終わった後、新郎新婦たちは友人達とパーティーを開く予定だったが、都合により中止し、その後、自宅で二番膳を行った。ここには同じ班の人、檀家のお寺の人、在所のお宮の人、ヨボシ子の人、式に出席していない親戚、披露宴の際、留守番をしてくれた人たちなどを招待する。翌日、新郎新婦は新婚旅行へ出発した。そして新婦の母が近所の方々に挨拶代わりに饅頭を配った。

IV. 婚礼の変化のまとめ

このように、婚礼の形態を時代に沿って見ていくと、いくつかの変化に気がつく。

①結婚式を行う場の変化

私が収集したデータでは、1974（昭和49）年の時点では、まだ自宅結婚式が主流だったらしいが、1985（昭和60）年は自宅外での結婚式が行われている。この間に、婚礼の儀礼のうち、家で行うもの（「合わせ水」や「仏壇参り」など）と、外の式場で行うもの（披露宴など）とが分離していった。1970年代後半から1980年代前半の間に結婚式の場のありかたが大きく変わったといえる。

②結婚式に出席する人と、参加のありかたの変化

1950年代、新郎は式に参加しなかったが1960年頃から参加するようになった。1950年代～1970年代前半には親兄弟・親戚が式の主な出席者であり、友人や婿の近所の人々は二番膳に招待するという形式が多かったが、最近では結婚式に新郎新婦の勤める会社の関係者を招待することが多くなった。Uさんは、一緒に働く課の人々を招待したといていた。また友人の招待に関しては、新郎新婦とその友人達だけのパーティーを行うこともあるという。このような形

態は1972年には行われていた。二番膳に友人を招待することは、あまりないようだ。1985（昭和60）年に結婚した女性は「新婚旅行に行っていたので、残酒（二番膳）は知らない」という。1960年代頃から、式後すぐに新婚旅行に行くことが多くなったようで、残酒に参加しない、もしくは残酒を知らない新郎新婦が多くなっている。

③式を行う時間帯の変化

1950年代は夜に嫁入りすることが一般的であったようだ。これは戦時中に、暗い夜の中に嫁入りする習慣が残っていたためと考えられる。Ⅲ.で記述した事例によると、1960年代半ばから後半にかけての間に、夜の嫁入りがなくなったと思われる。1972年に結婚した夫婦は、「午前中は縁起がいいので、めでたい事は午前中に済ませるようにする」と語っており、現在でも嫁入りは午前中に行われている。

④三々九度の変化

1950年代後半の式では、「三々九度」には新郎は参加せず、新婦1人で行っていたが、1960年代の前半からは新郎も参加するようになって来ている。

以上の4つが大きな変化である。

そして、このような変化を続ける婚礼形態の中でも、今も昔も変わらず続いている儀式がある。「合わせ水」や「仏壇参り」、あるいは「花嫁暖簾」をくぐるというものだ。

これらの変化するもの、そうでないものの時代の背景、それに関する人々の意識の変化を踏まえながら、さらに詳しく述べてみたいと思う。

V. 考察

この50年間で変化し続けている婚礼だが、中でも最も大きな変化といえるのは式場の変化である。1970年代から徐々に自宅での結婚式はなくなり始め、現在はホテルや結婚式用の施設などで、式を挙げるカップルが一般的になっている。これについて、Aさんは「結婚式を扱う商売が、ここ（杉野屋）にも参入してきて、式の形態が変わってきた」という。また「式場結婚式が一般的になってきて、自分のうち（の子）も人並みに式場で結婚式を挙げさせたい」という親の気持ちも関係していると考えられる。最近では結婚式のプランも本人たちで決められるので、オリジナルの式・個性的な式を好む現代のカップルたちは式場での結婚式に惹かれるのだろう。

また、職場の友達が出席するようになった関係で、杉野屋よりも金沢で結婚式をしたほうが、人が集まりやすいという利便性も、この式場の変化に関係しているだろう。

そして、その中で結婚における人の関わり方にも変化が見られるようになった。結婚式への参加者の変化をみると、「結婚」はイエとイエのつながりから、個人と個人のつながりへ変わったといえる。これは、新郎新婦の生活の時代ごとの変化にも大きく関係している。

以前は、近所同士のつながりや親戚関係のつながりが重視されており、新郎新婦の関係者というよりも、親（イエ）と深い関係にある人たちが招待されていた。しかし、新郎新婦が会社勤めをするようになってから、職場の同僚・上司、友人などの新郎新婦個人の関係者が多く招待されるようになった。今回、私が話を聞いた既婚男性の何人かが、「男が結婚する理由の1つに、社会的地位を認めて欲しいというものがある」と語っていた。また、「息子の結婚式に会社の人を呼ぶのは、祝辞が欲しいから」と語っていた母親もいた。このことから、式に会社の関係者を呼ぶのは、周りの人々に一人前になったことを認めて欲しいという気持ちの表れとも考えられる。他方で、それぞれの個人を取り巻く社会的なつながりが集落外での仕事などを通じて個人の生活圏の広がりとともに多様化したことも、招待客の変化の背景としてある。

二番膳の「残酒」は新郎新婦のためというより、近所付き合い、家同士の関係の強化をはかるものと考えられるが、最近では結婚式のあと、そのまま新婚旅行に行くように、新郎新婦本人の予定が優先され、重要視されている。以前のように「〇〇家の嫁」として、近所の人に紹介する「残酒」の儀式の意味は薄れてきているように思われる。

また、婚礼そのものではないが、結婚式の直後に新婚旅行に行く夫婦が増えたのは、イエのつながりよりも、結婚する当事者としての個人の意思が重視されるようになったといえる。

そして、婚礼に新郎が参加したり、三々九度を夫婦揃ってするようになったことに対して、ある60歳代の男性は、「それまで婚礼において用なし的な存在であった新郎が、新婦と同じように扱われるようになった」と述べていた。いわば、かつてみられたような、婚礼における「嫁迎え」中心の性格がなくなったと考えられる。

現在でも行われている「合わせ水」は、夫婦がこの先1つとなって、今後の家の繁栄のために努力するという意味が込められているそうだが、2002（平成14）年に結婚した女性は「合わせ水」は行ったが、この意味を知らなかった。だが、その女性の姑は「伝統的なことなので、せっかくだからして欲しい」という気持ちを語った。また、先祖に参る「仏壇参り」に関して、「最近では仏壇参りもしないで、簡単に済ませるところもあるようだが、せっかくだから、来ていただきたい」と語っていた。この2つの儀式は、必ずしなければいけないという決まりがあるわけではないが、もともとは他人である者同士が1つになって生きていくけじめとして、今も昔も重要視されているのではないかと思った。

そして「花嫁暖簾」も、嫁入り道具として新婦側が作って持ってくるのが一般的となっているが、これも決まっていることではない。しかし、あえて新婦側がつくる理由を、ある新郎の

母親は「お嫁さんの家の家紋を、暖簾に入れてあげたいから。送り出す相手側の気持ちを考慮したい」と語った。ここにはまた、新婦を受け入れる側としてのけじめが感じられた。

婚礼と言うものは、個々のイエないしは本人の事情や選択によるものであるため、本来その変化の過程を整合的に年代区分することはできない。しかし他方で、結婚と婚礼の時代ごとの変化の流れは存在しているのである。また、現代では結婚式のありかたを決めるのは、本人の意向が主であるが、親もなお関与している。いわば現代の婚礼は、古いものと新しいものの併存として捉えることもできる。

そのような中で、いつの時代にも婚礼において親が子の幸せを願う気持ちは変わらないと感じた。そういった思いが、それぞれの婚礼に表れている。今後も婚礼の形は変化していくだろうが、どれもが親や子の気持ちの込もった素晴らしいものであろう。